



## 第76回卒業証書授与式 式辞

日差しが日一日と温かさを増し、桜の蕾も色付き始めるなど、春の息吹が強く感じられる今日、ご来賓として宇都宮市教育委員会様、宇都宮市議会議長様、PTA会長様、地域協議会委員の皆様、そして多数の卒業生保護者の皆様のご臨席を賜り、令和6年度第76回卒業証書授与式が挙行できますことを、心から感謝し、厚くお礼申し上げます。



173名の3年生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんは、本日をもって、9年間の義務教育の課程を終えることとなります。皆さんの中学校生活は、新型コロナウイルス感染症の影響が終る中でのスタートでした。徐々に日常生活が戻り、最終学年になった今年度は、奈良・京都への修学旅行。躍動した陽西ソーラン、大迫力の綱引き、大声援のリレーなど大いに盛り上がった体育祭。クラスが心ひとつになった合唱コンクール。様々な工夫を凝らして発表した文化祭。そして部活動では、汗だくで練習を重ね、チームが一丸となり気合いを入れて臨んだ最後の大会やコンクールなど……。貴重な経験と忘れられない思い出を宝物にすることができました。「諦めない心」と「前向きに頑張る気持ち」で一生懸命に取り組む3年生の姿に、1・2年生は、憧れを抱き、中学校生活の目標となりました。今年度は、完全燃焼できた1年間だったと思います。よくがんばりました。

さて、今年度、全校道徳として「四本の木」を題材に全クラスで授業を行いました。「どうしたら嵐にも耐えられる折れない木になれるのか」、題材にある4本の木に「自分のなりたい姿」を重ねながら、これからの自分の生き方を考える授業でした。丘の上に立つ一本の高い木、太くどっしりとした木、風になびくしなやかな木、いろいろな木とともに生きる森、他にも個性的な木を描く生徒がいて、自分らしさと生きる喜びを追い求める皆さんの姿はとても輝いていました。



ここで、木にまつわる実話を3つ紹介します。1本目の鎌倉の鶴岡八幡宮の大銀杏は樹齢1000年と言われ、鎌倉時代から人々に親しまれてきましたが、今から15年前の2010年(平成22年)3月10日、雪まじりの強風に耐えることができず、倒れてしまいました。樹齢をはるかに超えて生き続けた大木も、「これまでか」と思われましたが、すぐさま専門家の手が施され、20日後には大地に残った根から新芽がでてきました。あきらめかけた命のバトンがつながり、見る見る成長し、今では高さ10メートルほどの立派な木になっています。3年生と同じ年齢でもあり、10年後、20年後の成長した姿がとても楽しみです。



鶴岡八幡宮 提供

2本目は14年前の今日、2011年(平成23)年3月11日に東日本大震災による大津波の被害を受けた岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」です。これまで何度も津波の被害を受けてきた町は、海岸線に7万本の松を植林して町を守ってきましたが、かつてないほどの大津波は、松林どころか町をすべて飲み込んでしまいました。家も車も何もかもが流される中、樹齢170年、高さ27mの松の木1本だけが奇跡的に生き残りました。多くの大切な大切な命と財産を一瞬にして失った市民の苦しみはどれほどだったのか、、、。どん底にあった市民の心に立ち上がる勇気を与えたのは、どんなことがあっても負けない、強く生きる一本松の姿でした。残念ながら、1年後には枯れてしまいましたが、その木材を使ったモニュメントとして再生され、「奇跡の一本松」と呼ばれながら、きれいに整備された公園の真ん中にたたずんでいます。



陸前高田市役所 提供

一本松にしてみれば、7万本の仲間を失い、ひとりぼっち。寂しくないと言ったら嘘になるでしょう。でも、そこに立ち続けることの意味を知る一本松は、これからもこのまちを見守り、市民の心の支えになっていくのだと思います。なお、写真を提供してくださった陸前高田市から、卒業生に祝詞が届いていますので、後方掲示板をご覧ください。



宇都宮市役所 提供

3本目は、我が宇都宮市、市役所の近くにある、高さ33mの「旭町のおおいちょう」です。終戦直前の1945年(昭和20年)7月12日夜、宇都宮市は空爆を受け、600人以上が死亡し、市街地の半分を焼失しました。大銀杏も焼け焦げ、ほとんどの枝を失い、無惨にも立ち枯れた姿となりました。ところが翌年の春には、焼け焦げた枝から新芽が芽吹いたのです。焼け野原に1本だけ立つ大銀杏は、市民に希望を与えてくれました。

3本の木は、私たちに優しさと逞しさとともに、生きることの意味を教えてくれています。そして命あるすべてのものをリスペクトしながら、それを生きる糧としてきた先人たちに、深く感謝したいと思います。

ここで「すべての卒業生をリスペクト」した仲間を紹介します。このあと答辞を述べる清水彩有伽さんですが、卒業式に向けて2つの答辞を用意してくれました。その一つ、学年練習で読み上げられたものは、卒業生173名全員の氏名から一文字ずつとって作られた原稿用紙9枚にも及ぶ大作でした。清水さんはこう言います。この世に生を受け、名前に込められた思いを受け止めながら、個性豊かに成長してきたこと。そして陽西中の一員としてかけがえのない大切な存在であったこと、それを表現し、伝えたかったのだと。今日の答辞に名前はありませんが、答辞に込められた一言一言に中学校生活を振り返り、自分と仲間、先生や家族というかけがえのない存在に感謝しながら、これから踏み出す自分の道に希望を膨らませてほしいと思います。



出典：国立国会図書館  
「近代日本人の肖像」

全校道徳から、もう一つ。「どのような人になりたいのか」この授業での問いかけに、「サウイフモノニワタシハナリタイ」と締めくくる宮沢賢治の詩が浮かびました。「雨にも負けず、風にも負けず、雪にも夏の暑さにも負けぬ丈夫な体を持ち、欲はなく、決していからず、いつも静かに笑っている」さらに、質素に生きることや人の助けになりたいといった思いが綴られ、最後は、「そういう者に、私はなりたい」で締めくくられています。

時代が違い古風な詩ですが、変化の激しい現代社会を生きる私たちに、自分をしっかり持ちながら、焦らずに1日1日を大切に生きていきたいと思います。語りかけてくれている気がします。「四本の木」を題材にした全校道徳の学びのように、「どういう人間になりたいのか」と常に自分に問いかけてほしいと思います。理想や憧れをいだと、人は成長します。理想や憧れに向かって生きることが、幸せを追求することなのだと思います。

日本は今、高度情報化社会の進展や経済の急激なグローバル化、少子高齢化による人口減少や自然災害など、私たちの生活に大きな変化をもたらす課題を抱えています。これからどんな時代が訪れようとも、卒業生の皆さんには、「夢や希望に満ち溢れた豊かな人生を送ってほしい」と願っています。そして、「レジリエンス」を鍛えてください。「レジリエンス」とは、失敗を恐れず、失敗から立ち直る力、回復する力、つまりへこたれないこと。生きるたくましさのことです。何事にもエネルギーな陽西生です。やらないよりやってみる。立ち止まるのではなく一歩前に進んでみるという勇気を持ちながら、これからの自分の人生を切り拓いていってください。最後はいつも皆さんに投げかけている決まり文句で締めたいと思います。「やれ」でやるより、「やる」でやれ。「やれ」でやるより、「やる」でやれ。



最後になりましたが、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。長くも、そしてあっという間にも感じられる義務教育の9年間だったことと思います。とりわけ中学校の3年間は、様々な面でご理解、ご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。今後は、地域の良き理解者として、本校の教育活動にさらなるご支援を賜りますようお願い申し上げます。それでは、卒業生の皆さん。これからの皆さんの前途に幸多かれと祈りつつ、悔いのない確かな一歩を踏み出してくれることを願い、式辞と致します。

令和7年3月11日 宇都宮市立陽西中学校長 鈴木佳之